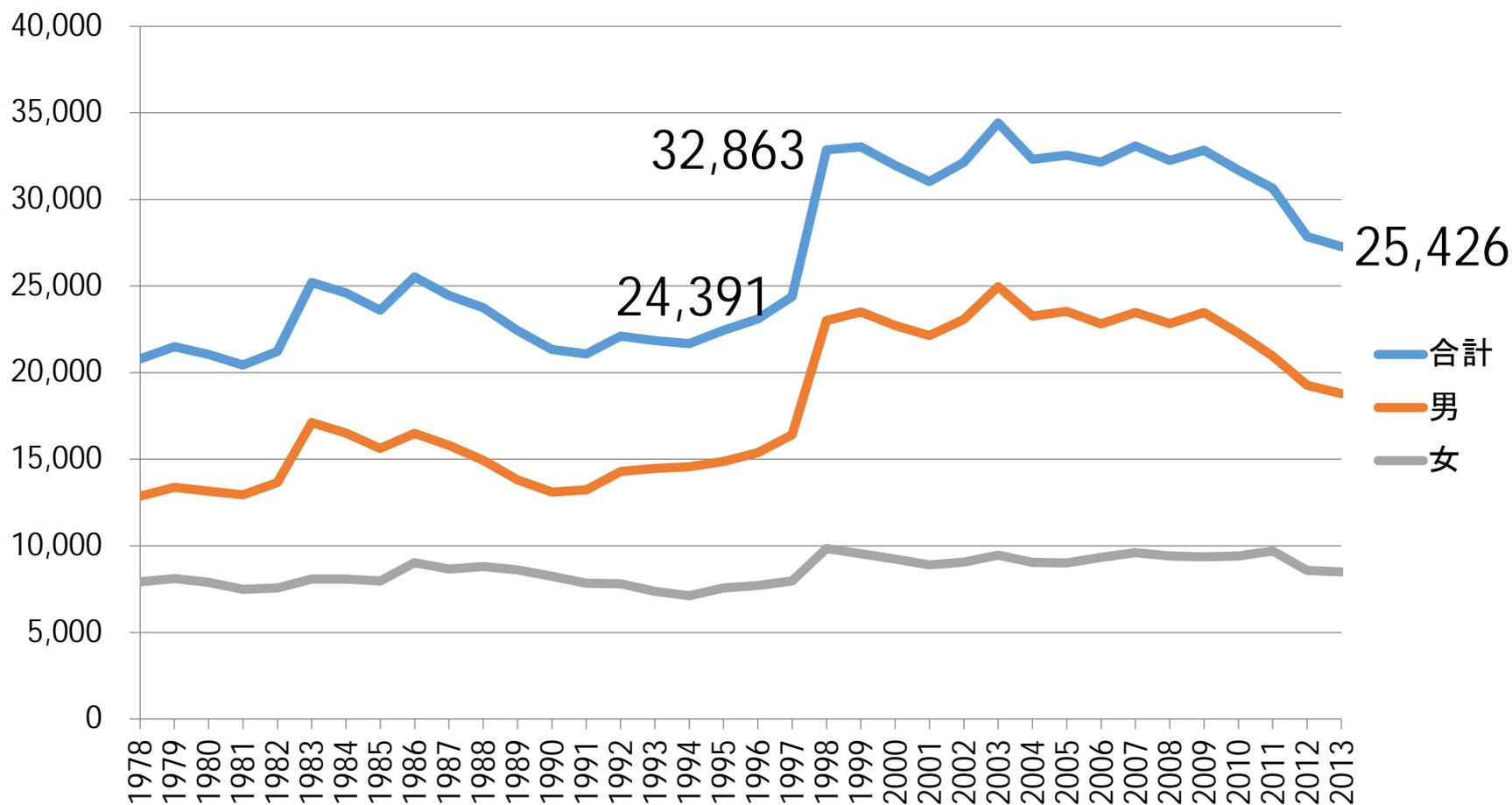


## (6)うつ病以外の精神疾患等によるハイリスク者対策の推進

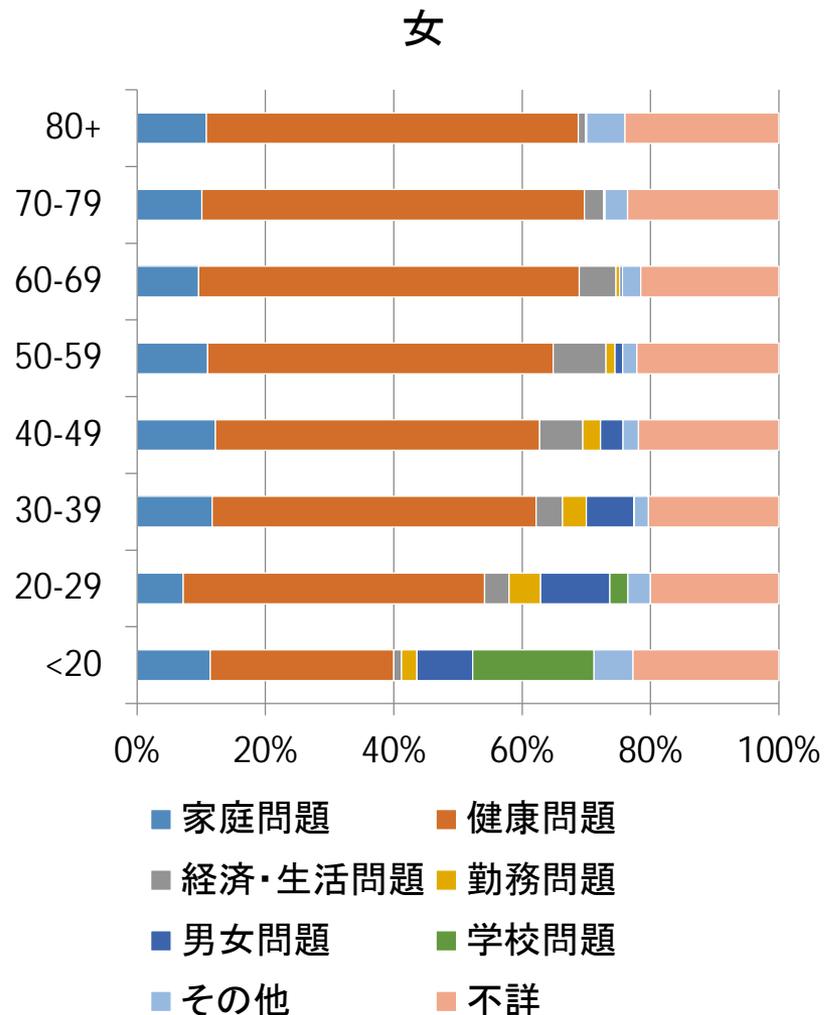
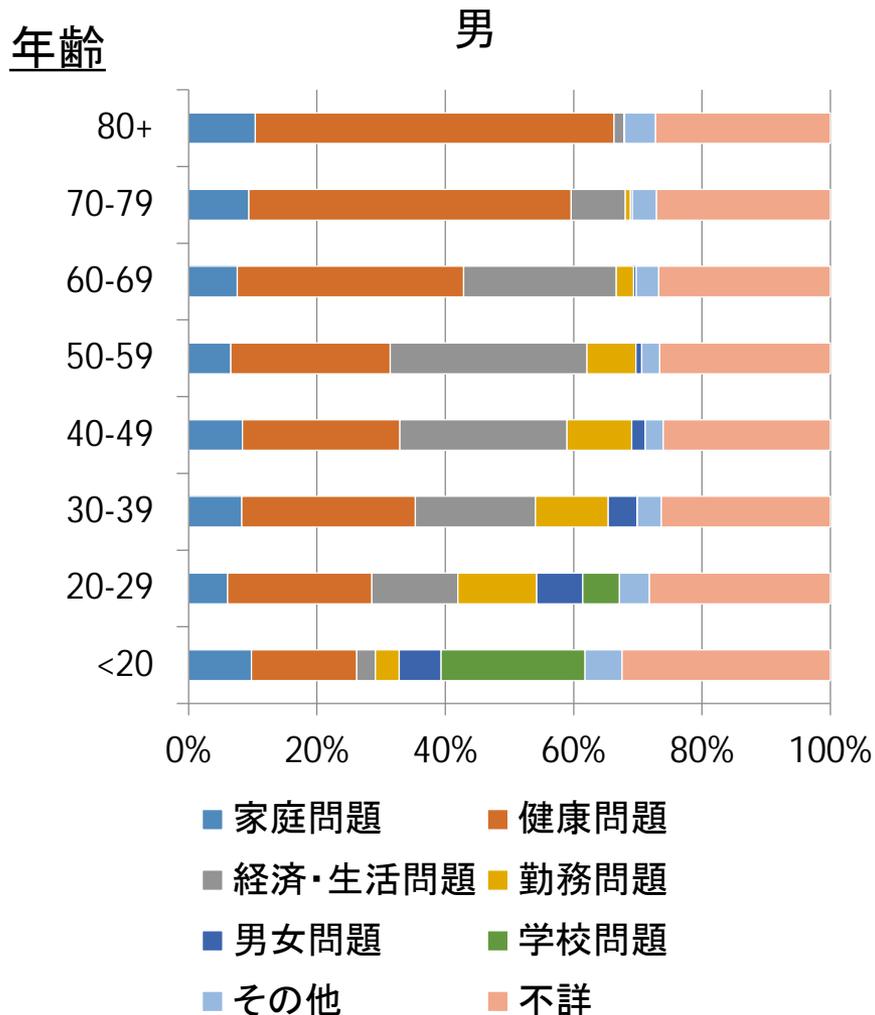
- うつ病以外の自殺の危険因子である統合失調症, アルコール依存症, 薬物依存症, 病的賭博等について, 借金や家族問題等との関連性も踏まえて, 調査研究を推進するとともに, 継続的に治療・援助を行うための体制の整備, 自助活動に対する支援等を行う

# 「自殺統計」による自殺死亡数

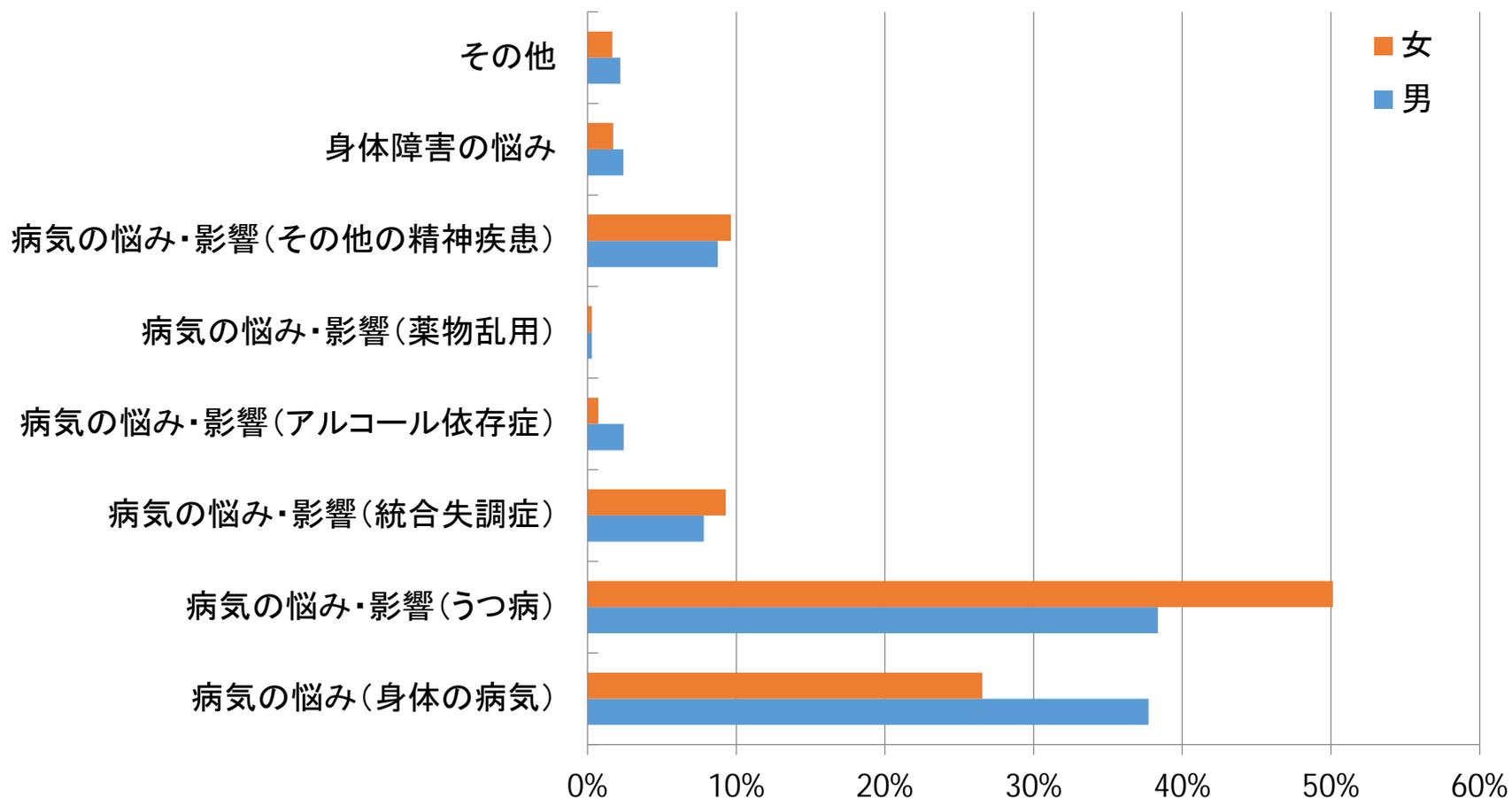


平成26年の自殺者数は25,426人(暫定値)は、対前年比1,857人(約7%)減

# 年齢階級別の自殺の原因・動機 (2009-2011)

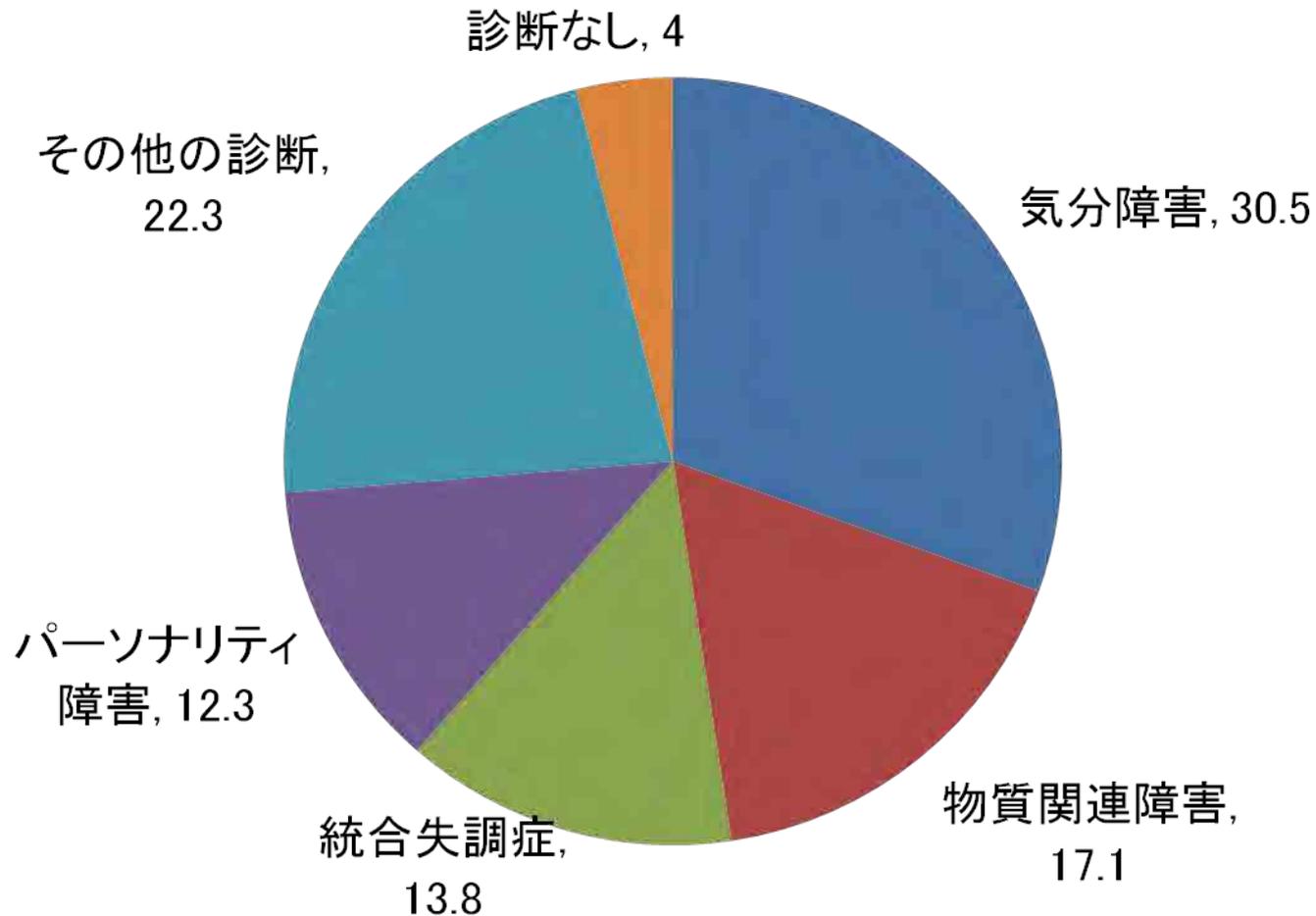


# 原因・動機としての健康問題の詳細(2012)



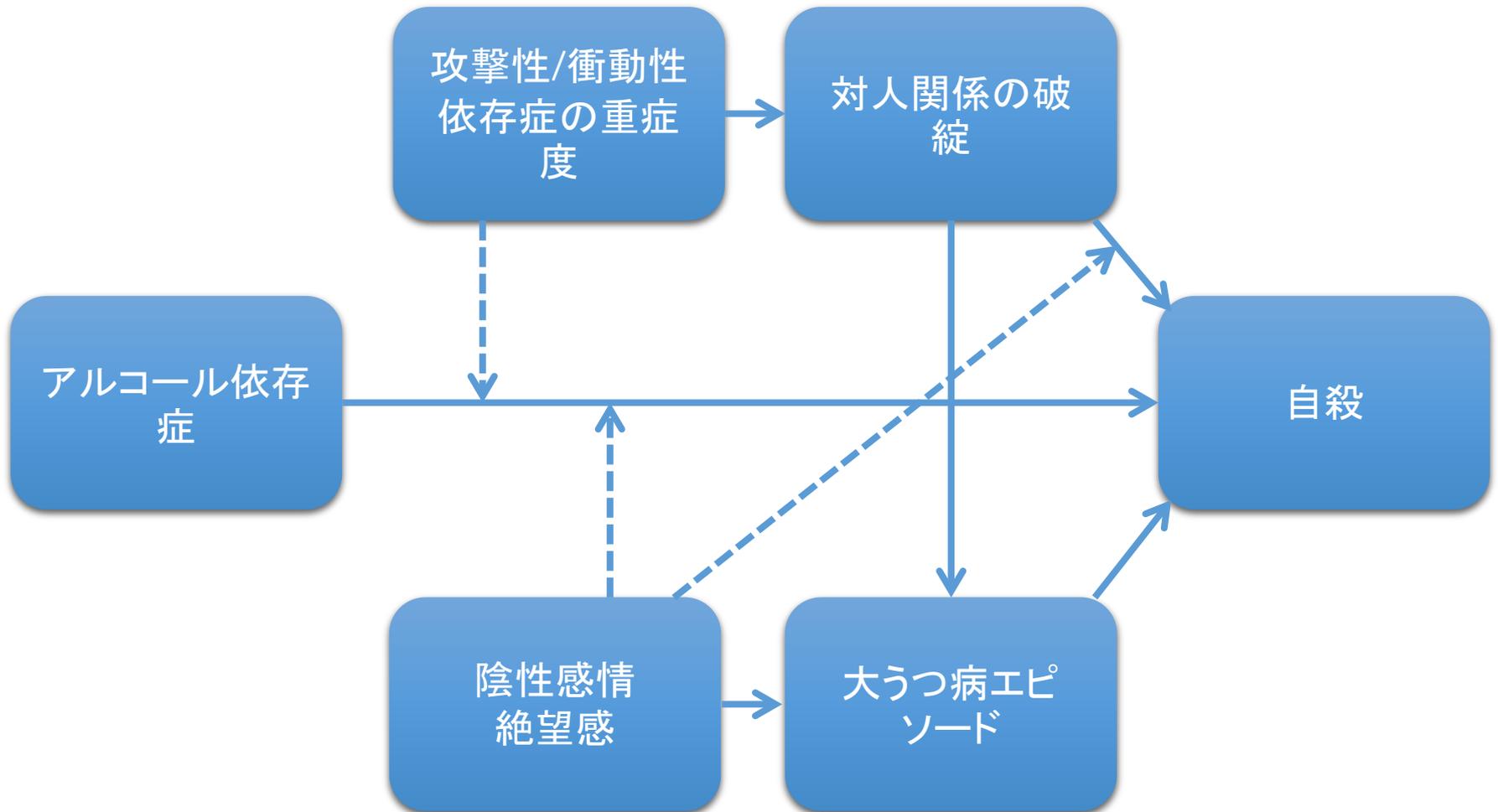
- 2007年以降, 自殺者1人について遺書や生前の言動などにより明らかに推定できる原因・動機は3つまで計上されている。
- 割合算出の分母は健康問題が自殺の原因・動機として特定された者の総数

# 自殺と精神疾患



N=16,524, 20,613診断

# アルコール依存症と自殺の関係に影響する因子のモデル



# 飲酒と自殺

## • 飲酒直後の自殺

自殺で亡くなった方の体からアルコールが検出されることは珍しいことではありません。日本の調査でも自殺例全体のアルコール検出率は32.8%で毒物死、焼死、轢死、墜落死で高濃度のアルコールが検出されています。海外の調査でも、自殺した人からは平均で37%からアルコールが検出され、自殺未遂で救急病院を受診した人からは平均で40%の人からアルコールが検出されています。このように自殺の直前に飲酒する割合は高いことが知られていますが、その理由としてa) 飲酒が絶望感、孤独感、憂うつ気分といった心理的苦痛を増強する、b) 飲酒が自分に対する攻撃性を高める、c) 飲酒は人の予想に変化をもたらして死にたい気持ちを行動に移すきっかけとなる、d) 視野を狭めて自殺を予防するために有効な解決方法を講じられなくなるといった心理的变化が提唱されています

## • 習慣的な飲酒と自殺

中年男性を7年以上追跡した国内の調査では月に1-3日程度飲酒する人が自殺で死亡する危険性に比べて非飲酒者および週に414グラム(日本酒約18合に相当)以上の大量飲酒者が自殺で死亡する危険性は2.3倍と高く、少量ないし中等量の飲酒では自殺による死亡の危険性は低くなるという結果でした。国内のもう一つの男性の調査では上述の調査とは結果がやや異なり、飲酒量に比例して自殺で死亡する危険性が高くなるという結果でした。いずれにせよ、二つの調査では大量の習慣的な飲酒が自殺の危険を高める点では共通した結果でした

## • アルコール乱用・依存症と自殺

アルコール依存症の人は依存症ではない人と比較して自殺の危険性が約6倍高いとされています。特にうつ病の合併、離婚や別離といった対人関係のストレス、社会的サポートの欠如、非雇用、重篤な身体疾患、単身生活といった要因が自殺の危険性を高めるとされます。また、アルコールの乱用そのものも自殺の危険性を高め、一方、自殺で亡くなった人にうつ病だった人が多いことは有名ですが、アルコール依存症はうつ病の次に頻度が高く、自殺で亡くなった人の15-56%にアルコール乱用または依存がみられたと報告されています